

年齢別で見たテレビの見方の変化
—子どもとバラエティ番組の罰ゲームを中心に—
How the viewpoint of watching TV changes according to age
～focusing on children and penalty game on variety show～

◎楊 仲軒¹
Cyuken YOU

¹関西大学大学院社会学研究科マス・コミュニケーション学専攻 博士課程後期課程
The Graduate School of Sociology, Department of Mass Communication Studies, Kansai University

要旨…本研究では、子どものバラエティ番組の罰ゲームに対する見方が、年齢によってどのように変化するかについて明らかにすることを目的とする。子どもはバラエティ番組の罰ゲーム描写の悪影響をうけるといった言説が多く語られている。罰ゲームを視聴した子どもは一律に悪影響を受けているとは断言できない。子どもたちはさまざまな見方でバラエティの罰ゲームを受容していると考えられる。本研究では、2011年9月に、台湾台中市にある小中学校の児童・生徒1000人を対象に集合調査法でアンケート調査を実施した。バラエティの罰ゲームに対する見方の四つの類型を設定し、年齢低（小5、小6）、年齢中（中1、中2）、年齢高（中3）の三つの年齢グループを比較した。調査の結果、四つの見方の類型は各年齢グループによって差異が見られ、バラエティ番組の罰ゲームに対する見方も年齢によって変化することがわかった。子どもはバラエティ番組の罰ゲームに対して、一律の見方ではなく、さまざまな見方で受容していることが明らかになった。

キーワード 子ども、台湾、バラエティ番組、罰ゲーム

1. 研究の経緯と目的

台湾におけるバラエティ番組は日本と同じく子どもに人気があり、頻繁に視聴される番組である。しかし、バラエティ番組は、笑いをとる手段として他人に物を投げたり、たたいたりからかったりするという描写がよくみられる。バラエティ番組の罰ゲームの暴力表現は刑事ドラマや映画のそれと比べると、相当軽いと思われており、バラエティ番組の罰ゲームはあくまで「笑い」と「いじめ」の間にある曖昧なグレーゾーンに置かれている。もちろん、話芸で笑いをとるやり方もあるが、近年目立っているのはお笑い芸人が肉体的苦痛や言葉による、罵倒といった本意なことをやらされる罰ゲームであり、芸人の苦痛表現や失敗で視聴率を獲得するなどの傾向がある。このような「演出」を子どもに見せると、子どもに悪影響を与えると考えられ、いじめ行為の要因ではないかといった論争が議論され続けてきた。BPOの青少年委員会のデータによれば、番組内容に関する苦情の中で「いじめ・虐待に関する意見」は16%¹である。しかし、それらのバラエティ番組に対して批判的意見以外に、お笑い番組を単純に楽しめばよい、バラエティ番組の内容は子どもに対して悪影響はないという意見もあった。バラエティ番組に対する意見は人によって違うということを踏まえ、バラエティ番組を視聴することによってどの子どもも同じ影響を受けるというわけではなく、それに対する見方はそれぞれ異なる可能性も考えなければならない。

本研究で、特に注目したのは、いじめの手段として真似されやすいバラエティ番組の罰ゲームである。子どものバラエティ番組の罰ゲームに対する見方が、年齢によってどのように変化するかについて明らかにすることを目的とする。子どもはバラエティ番組の罰ゲーム描写に影響され、いじめなどの非行行為を起こすといった言説が多いが、バラエティ番組の罰ゲームを視聴した子どもは一律に悪影響を受けているとは断言できない。子どもたちはさまざまな見方でバラエティ番組の罰ゲームを受容していると考えられる。本研究は、送り手の意図に関わらず、受け手である子どもがどのような見方で罰ゲームを受容しているのか、そしてその見方は、子どもの年齢の変化によってどのように変化するかという問題意識を、実証的に明らかにすることが目的である。

2. 先行研究

テレビの効果に関する先行研究は、主にテレビがいかに関暴力シーンによって子どもに暴力的影響を与えるかが焦点であった。まず、佐々木輝美(1996)は暴力番組を気分転換中心型、感情移入中心型、知的満足中心型、笑い中心型、平均的充足型の五つのタイプに類型した。佐々木は、笑い中心型の例として「志村ケンのだいじょぶだぁ」を取り挙げ、このような笑い中心型では暴力がおもしろおかしく描かれるため、視聴者は暴力に対して平気になってしまうことが予想されると示唆している。佐々木の研究に従って、渡辺功(2001)は、因子分析で平均的充足型以外の四つの暴力番組タイプのそれぞれに対応している暴力番組の理論に基づく効果類型を検証した。そのなかで、渡辺はバラエティ番組(＝脱感作型番組)は視聴者の弱抑制型反社会的行動を引き起こす1つの要因であると述べた。そのほか、無藤ら(2010)は児童期からよくドラマ、お笑いのバラエティ、トーク番組、歌・音楽番組を視聴する子どもは、特に中学生になってから社会的な逸脱行動をする傾向が高いと述べている。そして、それらの番組をよく視聴することは、その後の社会的・心理的不適応状態を高める可能性が高いことを示唆している。日本以外での研究では、台湾の児童福利連盟文教基金会²の調査(2011～2013)によると、暴力番組の視聴は子どもの学校でのいじめ行為を助長する要因になり、子どもはバラエティ番組、暴力で敵を倒す内容を含んだアニメなどの暴力番組を視聴することを避けなければならないとされている。

年齢別に見たテレビの見方変化に関しては、稲増龍夫によれば(1985)、ドラマ『スチュワーデス物語』³の場合、現実世界と相応しくない内容に対して、視聴者が感動するか、怒るか、いずれにせよ、それらはドラマの制作側の意図に対して子どもは肯定的、大人は否定的見方をする。若者は送り手の意図を優越感にもとづく視聴態度で、送り手の笑わせようという意図が存在していないのにもかかわらず、勝手に新しい解釈＝笑いとしての見方をもつ。また、「サトリ」という見方は直接受けたメッセージに反応するのではなく、対象化して、客観的立場で情報を読み取るという見方である。従って、子どもがバラエティ番組の罰ゲームを視聴するときに、上述した暴力の学習対象として受容する見方以外の見方をしている可能性を考えなければならない。

3. 研究の方法

本研究では、2011年9月に、台湾台中市にある小中学校⁴の児童・生徒1000人を対象に集合調査法でアンケート調査⁵を実施した。問題設定は、バラエティの罰ゲームを視聴して快感を抱くか不快感を抱くかという「快・不快」軸と、善いことと肯定するか、悪いことと批判するか「善・悪」軸を設けた。これら二つの軸を図1のようにクロスさせ四つの類型を設定した。四つの類型とは、「快×善＝素直型」(罰を受けた人のリアクションを笑う見方)、「快感×悪＝遊戯型」(罰ゲームを悪いこととして認識しているが、快感を抱く見方)、「不快×悪＝批判型」(批判的目線で否定する見方)、「不快×善＝妥協型」(不快感をもつが、自分なりの解釈で受け入れる見方)である。これらの見方の割合が年齢別に——年齢低(小5、小6)、年齢中(中1、中2)、年齢高(中3)——どのように変化するかを分析した。さらに、図1の矢印のように、調査対象の子どもの年齢が高くなるにつれて素直型→遊戯型→批判型→妥協型の順で変化すると仮定し、検証を行った。

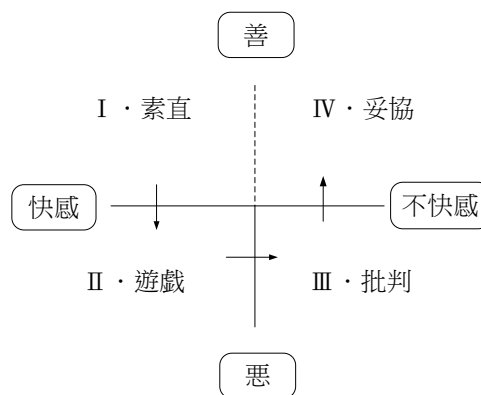


図1. バラエティ番組の罰ゲームに対する見方の四類型

4. 研究の結果と得られた知見

調査の結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 年齢低グループでは、素直型が最も多かった（50.0%）。続いて、遊戯型 37.7%、批判型 11.7%、妥協型 1.0%であった。
- (2) 年齢中グループでは、遊戯型が最も多かった（53.4%）。続いて、素直型 30.6%、批判型 12.3%、妥協型 3.7%であった。
- (3) 年齢高グループでは、遊戯型が最も多かった（40.5%）。続いて、批判型 28.3%、素直型 23.7%、妥協型 7.5%であった。
- (4) 調査対象の子どもの年齢が高くなるにつれ素直型→遊戯型→批判型→妥協型の順で変化すると仮定したが、(1)～(3)の結果を見ると、年齢高グループの子どもの中には、バラエティ番組の罰ゲームに対する見方は妥協型への変化も見られるが、批判型と遊戯型が多数であった。しかしながら、妥協型と批判型の比率は年齢が高くなるにつれ増加する傾向が見られたため、ある程度の年齢に達すると、妥協型と批判型が多数になる可能性が考えられる。
- (5) 素直型は、年齢が高くなるにつれ減少した（50.0%→30.6%→23.7%）のに対し、批判型（11.7%→12.3%→28.3%）と妥協型（1.0%→3.7%→7.5%）は同じく年齢が高くなるほど増加した。
- (6) 遊戯型は年齢中グループで高まったが、年齢高グループになると減少する傾向が再び見られた（37.7%→53.4%→40.5%）。ここから、年齢中グループの子どもは、罰ゲームを「悪」として認識しているが、まだ罰ゲームに快感を抱いているため、バラエティ番組の罰ゲームに最も影響されやすい年齢層であると考えられる。遊戯型が年齢中グループから減少する傾向が見られたのに対し、批判型は年齢中グループから増加する傾向が見られ、年齢中グループにおいて子どもの罰ゲームに対する感覚が快感から不快感に変わる傾向があると考えられる。
- (7) 批判型は、年齢低グループ（批判 11.7%、素直 50.0%）と年齢中グループ（批判 12.3%、素直 30.6%）では素直型より少ないが、年齢高グループにおいて批判型の比率は素直型を超える（批判 28.3%、素直 23.7%）。このことは年齢の増加とともに、家庭や学校教育で罰ゲームによる悪影響に関する言説を学習し、罰ゲームに対する評価が善から悪に変化するためだと考えられる。さらに、同調査では、いじめの接触度が高い者は罰ゲームに対して不快を感じる傾向があり、子どもは年齢が高くなるほど、いじめの接触機会も増え、そのために快から不快になるといえる。
- (8) 無藤ら（2010）の、小学生の時期からよくドラマ、お笑いのバラエティ、トーク番組、歌・音楽番組を見る子どもは、その後、特に中学生になってから、社会的な逸脱行動をする傾向が高いという研究結論と対照すると、遊戯型（＝罰ゲームを悪いこととして認識しているが、快感を抱く見方）の見方の年齢別の変化と類似した傾向が見られた。さらに、台湾の児童福利連盟文教基金会の調査⁶（2011～2013）によると、台湾ではいじめの側、いじめられる側のどちらも含めると、中学でのいじめ発生率ももっとも高い。それは年齢中グループ（中1、中2）の子どもはバラエティ番組の罰ゲームを悪いことと認識しているが、おもしろいから真似してやってもかまわないという心理でいじめの手段になる可能性が考えられる。

以上の結果をまとめると、子どもはバラエティ番組の罰ゲームに対して、単一の見方（＝暴力として受容）ではなく、さまざまな見方をしているということである。そして、年齢の変化によって罰ゲームに対する見方も変化することが明らかになった。しかし、今回の調査では、バラエティ番組の罰ゲームに対して子どもの見方は素直型→遊戯型→批判型→妥協型の順で変化すると仮定したが、検定の結果は遊戯型→批判型→妥協型→素直型の順になり、それは、調査対象の年齢層の幅の設定が不十分であったためだと考えられ、罰ゲームは悪いことと認識しているが、おもしろいという感覚はまだ不快感の嫌悪には変わってないと考えられる。しかし、大人になると、素直型と遊戯型の見方で罰ゲームを受容する人が完全に消失するのではなく、あくまでも比較的比率の変化である。

また、佐々木（1996）によると、タレントが失敗する場面を見て笑い、それが繰り返されることによって、実際に失敗した人を見ても、それを助けたりかばったりするのではなく、ただ笑って見ているようになる可能性もあると示唆している。そして、無藤ら（2010）と、児童福利連盟文教基金会の調査（2011～2013）から見ると、年齢中グループの子どもはもっともバラエティ番組の罰ゲームに影響されやすい年齢層であると考えられる。さらに、まだ罰ゲームに対して快感を感じているため、新聞メディア、親や学校教育などのルートから罰ゲームは悪いことだと教育され認識し続けていても、罰ゲームが遊びやいじめの手段として使われる可能性もあるといえる。

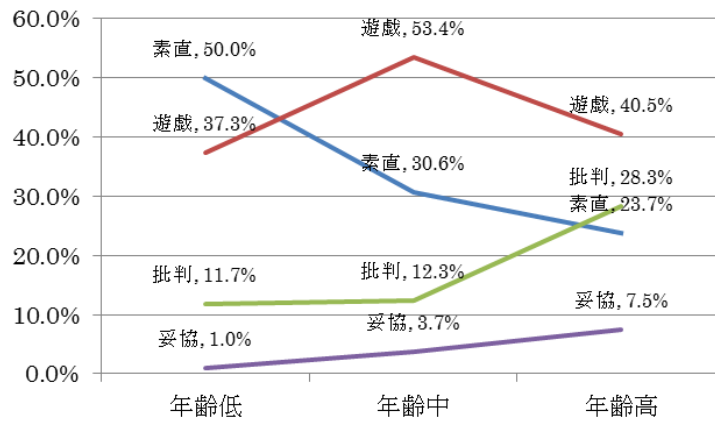


図2. 年齢別で見た見方の変化

参考文献

- 1) Bandura, A., Ross, D., & Ross, S.A., 1963, 『Vicarious reinforcement and imitative learning』 The Journal of Abnormal and Social Psychology, Vol.67(6), Dec 1963, 601-607.
- 2) BPO放送と青少年に関する委員会(青少年委員会), 2000~2004, 『青少年へのテレビメディアの影響調査』。
- 3) 陳静音, 2010, 『國小兒童對卡通節目暴力行為之解讀與社會真實性認知之研究』屏東教育大學教育行政研究所碩士論文。
- 4) Dabman, R.S., & Thomas, M.H., 1974, 『Dose media violence increase children's tolerance of real-life aggression?』 Developmental Psychology, Vol.10(3), May 1974, 418-421.
- 5) Gebner, G., & Gross, D., 1976, 『Living with television: The violence profile.』 Volume 26, Issue 2, pages 172-194.
- 6) 稲増龍夫, 1985, 『記号化社会の消費 第四章 メディア文化環境における新しい消費者』CBS出版。
- 7) 無藤隆, 角屋詩織, 2010, 『児童期にドラマ, お笑いのバラエティ, トーク番組, 音楽番組をよく見ることが思春期の子どもの社会的・心理的不適応に及ぼす縦断的影響』教育大学研究紀要29, 101-112.
- 8) 兒童福利連盟文教基金会, 2011, 『2011年台灣校園關係霸凌調查報告』兒童霸凌調查報告。
- 9) 兒童福利連盟文教基金会, 2012, 『2012年台灣校園關係霸凌調查報告』兒童霸凌調查報告。
- 10) 兒童福利連盟文教基金会, 2013, 『2013年台灣校園關係霸凌調查報告』兒童霸凌調查報告。
- 11) 兒童福利連盟文教基金会, 2013, 『2013年兒童收視熱門時段之電視內容分析』兒童傳播權調查報告。
- 12) 佐々木輝美, 1993, 『テレビ暴力番組の類型化に関する実証的研究』国際基督教大学学報, IA, 教育研究35, 185-205.
- 13) ———, 1993, 『テレビ暴力に関する実証的研究の概観』国際基督教大学学報, IA, 教育研究28, 127-156(1986).
- 14) ———, 1996, 『メディアと暴力』勁草書房。
- 15) 渡辺功, 1996, 『テレビ暴力番組の反社会的行動に与える効果』International Christian University publications, I-A, Educational studies 38, 225-263, 1996(03-00).
- 16) ———, 2001, 『テレビ暴力番組の非社会的行動に及ぼす効果の実証的研究』International Christian University publications, I-A, Educational studies 43, 167-189, 2001(03-00).

¹ BPO 青少年委員会、(2010~2013・4)、「視聴者の意見(青少年に関する意見)」(2013年4月3日取得、http://www.bpo.gr.jp/?page_id=1159&meta_key=2013、筆者統計。

² 兒童福利連盟文教基金会は兒童(台湾では主に高校以下の子どもを指す)の福祉向上を中心に活動するNPOである。

³ 『スチュワーデス物語』TBS、1983年10月18日から1984年3月27日。

⁴ 調査を行った小学校と中学校は同じ地域にあって、同じ日に調査を実施した。

⁵ ①調査時間：2010年9月 ②調査母体：台湾、台中市小中学生1000名(小5と小6は333人、中1と中2は334人、中3は333人。男女比率は50%対50%、有効数982、有効回収率は98.2%) ③調査方法：集合法。無作為抽出した調査対象クラスの担任先生に依頼し、調査対象の小中学生に回答してもらった。回答時間は15分。

⁶ 調査対象は10歳から18歳の小中高生である。